

## ワーク中心

プログラム番号 2901A

# 学生の学びを促すシラバスの書き方

### ■講師

葛城 浩一（香川大学 大学教育基盤センター 能力開発部 准教授）

平成12年3月広島大学教育学部教育学科卒、平成22年広島大学にて博士（教育学）の学位取得。平成20年度より香川大学大学教育開発センター（現・大学教育基盤センター）准教授、平成21年度より香川大学大学院教育学研究科を兼任。

### ■プログラム概要

あなたはシラバスをどうやって書いていますか（書こうと思っていますか）？「シラバスなんてどうせ学生もちゃんと見やしないんだから適当に書いておけばいいだろう」なんて思っていませんか？実はシラバスの書き方にはいくつか重要なポイントがあって、そのポイントをおさえていないと、あなた自身は勿論のこと、学生が不利益を被ることもあります。

一方、うまくポイントをおさえて書くことができれば、シラバスは授業選択ガイドや契約書としての役割だけでなく、学生の学びを促す役割を果たすことができます。本講座では、シラバスを書く際のポイントについて解説し、そのポイントをふまえてご自身のシラバスを修正（作成）していただきます。

### ■準備物や事前課題

ご自分の授業のシラバスがあればご持参ください。

### ■主な受講対象

まだ講義経験がないか数年未満の講義経験の教員の方を歓迎します。

### ■本プログラムの到達目標

1. シラバスの定義を説明することができる。
2. 適切な目的を書くことができる。
3. 適切な目標を書くことができる。
4. 効果的な学習を促すスケジュールをデザインできる。
5. 適切な評価方法を書くことができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

プログラム番号 2901B

## グループワークで学ぶ自校の歴史 —『香川大学検定』を例に—

### ■講師

山本 珠美（香川大学 地域連携・生涯学習センター 准教授）

平成6年3月東京大学教養学部教養学科（科学史及び科学哲学分科）卒、平成11年3月同大学院教育学研究科博士課程（生涯教育計画）満期退学。平成16年4月、香川大学生涯学習教育研究センター（現地域連携・生涯学習センター）着任。平成20年度より、本学葛城准教授・学生と一緒に『香川大学検定』を作ると同時に、同冊子を用いて全学共通教育科目の中で自校教育を行っている。

### ■プログラム概要

前半では、担当講師が香川大学の全学共通教育科目「主題A 人生とキャリア」の中で実施している、グループワーク形式の自校教育の取組を紹介し、後半では、各自で自校教育のプログラム概要を考える演習を行います。

担当講師は、以前、クイズ形式（88問、のち108問）で香川大学について学ぶ冊子『香川大学検定』を、学生と一緒に作成しました（2008～2011年度）。『香川大学五十年史』等の分厚い正史は新生にとってはハードルが高く、手軽にかつ楽しく、自分が入学した大学がどのような大学であるか、知ってもらいたかったためです。この『香川大学検定』を用いて、グループワーク形式（おおむねグループ6人）で香川大学の歴史を学ぶ授業を行っています。その手法について、学生が準備した「フリップボード」の実物などもご覧頂きながら、ご紹介いたします。

後半では、各自の大学に既にある資源を使いつつ、講義形式ではなくグループワーク形式で自校教育を行う手法を、検討することにします。

### ■準備物や事前課題

勤務大学の沿革がわかるものが手元にあると望ましい。

### ■主な受講対象

自校教育に関心のある教職員。

### ■本プログラムの到達目標

グループワーク形式で行う自校教育のプログラム概要を作ることができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 2901C

# 反転授業をやってみよう —橋本メソッドの実践から—

### ■講師

金西 計英（徳島大学 総合教育センター ICT活用教育部門、  
大学開放実践センター 教授）

徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000年、博士（工学）を徳島大学より取得。関西学院大学、金沢工業大学、四国大学を経て、1999年より徳島大学へ。2009年より徳島大学大学開放実践センター教授。大学におけるe-Learningの開発、および運用の研究に取り組む。また、高等教育におけるICT活用の授業開発について、実践という観点から取り組む。

### ■プログラム概要

最近、アクティブラーニングに注目が集まっています。ここではアクティブラーニングの一種である「橋本メソッド」について紹介します。特に、「橋本メソッド」は反転授業と相性の良いことを説明し、反転授業を用いた「橋本メソッド」について示します。

本プログラムは、ワークショップ形式で、「橋本メソッド」について体験を通し学ぶことを目指します。まずは、反転授業についての理解を目指します。次に、簡易な形で「橋本メソッド」を体験してもらう予定です。具体的な授業の手法を体験することで、自らの授業で反転授業を実施する場合、いろいろな形態へ方式をアレンジすることが容易になると思います。

なお、「橋本メソッド」とは富山大学の橋本勝先生の開発した大人数向けのアクティブラーニングのことです。

1. 反転授業と橋本メソッドの紹介（ここでは講義式）
2. グループを作ろう
3. グループで作業してみよう
4. グループで発表しよう
5. 作業の振り返り

### ■準備物や事前課題

受講者に事前の課題がある場合は、お知らせします。

### ■主な受講対象

アクティブラーニングを授業の中で実施してみたいけれど、踏み出せないでいる教員の方を歓迎します（アクティブラーニングの一種を、実際にワークショップの中で経験してみますので、どんなものか体験することで理解が深まると思います）。

教務系の職員の方も、アクティブラーニングを実際に体験してみたいという方は歓迎します。

### ■本プログラムの到達目標

1. 反転授業について授業の構成方法等について説明できる。
2. 橋本メソッドについての授業手法等について説明できる。
3. 反転授業を橋本メソッドと組み合わせて実施する手順を説明できる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 大学職員の基礎力を考える

### ■講師

織田 隆司（愛媛大学 教育学生支援部 教育企画課 課長）

平成7年高知医科大学事務職員に採用。これまで弓削商船高等専門学校、大学評価・学位授与機構、愛媛大学で勤務。愛媛大学では経営企画課、財務企画課、学長秘書室、教育企画課、医学部総務課を経験し、平成30年度から現職。平成22・23年度に次世代リーダー養成研修を受講・修了。平成28年度SPOD-SDC認定。

### ■プログラム概要

スタッフ・ディベロップメント（SD）が大学設置基準に規定され、1年が経ちました。近年、環境の変化に伴って、さまざまな立場において求められる能力とその開発を巡って、審議会や学会等で活発に議論が行われるとともに、新聞や雑誌などで取り上げられています。その中では、所属部署に関わらず必要となる「基礎力」があると言われていますが、一般的に社会で求められる基礎力と、大学職員に求められる基礎力に違いはあるのでしょうか。

本プログラムでは、大学職員に求められる基礎力のいくつかに焦点をあて、参加者間で組織を超えた状況・情報を共有するとともに、どういったことが課題となっているか、また、その「基礎力」を職場でどう活かしていくのかについて考えていきます。

参加者間による意見交換により、職場で活かせるヒントを共有する機会にしませんか。皆様のご参加をお待ちしています。

### ■主な受講対象

係長相当級までの職員。

### ■本プログラムの到達目標

1. 大学職員に求められている「基礎力」とはどのようなものか、説明することができる。
2. 大学職員に求められている「基礎力」を活用する上での課題を挙げることができる。
3. 「基礎力」活用上の課題を解決するヒントを共有できる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 2901E

# 自発的な発言を促すアクティブラーニングのやりかた — 初歩のロジカル思考演習 —

### ■講師

山中 隆史（香川大学 創造工学部 教授）

平成2年3月京都大学法学部卒業。大手エネルギー会社において10年間の勤務の後、バイオ系ベンチャー企業に転職し、管理部門の統括者として新規事業を立ち上げ、大手商社との提携をはじめ経営全般に携わる。その後、10年以上にわたりビジネススクール（経営大学院）の専任教員として、ビジネスパーソンを対象に論理思考、プレゼンテーション、ファシリテーション等をテーマにアクティブラーニングを用いた教育に携わる。職務と並行し、平成26年神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程に入学（平成28年修了）。非言語コミュニケーションに関する研究も行っている。平成30年4月より現職。中小企業診断士。

### ■プログラム概要

アクティブラーニングにおいては、学生が自らの頭で考え、積極的にアウトプット（書き、話す）を繰り返すことが重要です。特に、学生の自発的な発言を促すために教員から非言語コミュニケーションも含め、どのような働きかけができるのでしょうか。

このプログラムでは、50名前後のクラスで、学生がグループ内やクラス全体で積極的に発言をすることを促すためのヒントを紹介します。1年次を対象に実施しているロジカル思考の基礎的な演習のクラスの発言の様子（映像）も紹介しながら、受講される皆様に多くのグループワークを体験していただきます。学生の積極的な発言を促しながらクラスを運営したいと考えておられる教員の方はもちろん、基礎的な論理思考そのものに興味のある教職員の方も是非受講してください。

受講者の皆様には、グループワークに積極的に参加していただくとともに日ごろの悩みや皆様の工夫を共有くださることをお願いします。

### ■主な受講対象

- ・学生の積極的な発言を促す授業に取り組みたい教員
- ・アクティブラーニング型授業（特にグループワーク）を取り入れたい教員
- ・論理思考の基礎的なポイント（特に伝え方）を振り返ってみたい教職員

### ■本プログラムの到達目標

1. 自発的な発言を促すためのポイント（事前準備や当日の運営）を説明できる。
2. グループワークを促進させるためのポイントを非言語も含めて説明できる。
3. 論理思考の基礎的なポイント（特に伝え方）を意識し、端的で円滑なコミュニケーションに活用できる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 職員のためのSP作成ワークショップ

### ■講師

重松 映美（聖カタリナ大学 就職課 係長）

岡山大学文学部を卒業後、平成 17 年 4 月聖カタリナ大学に採用。会計課での業務を経て、平成 22 年 4 月より現職。現在は学生の個別対応による就職支援業務や、年間を通じた就職ガイダンスの企画・実施を担当している。平成 28-29 年度 S P O D 次世代リーダー養成ゼミナール受講（7 期生）、平成 30 年 1 月修了。同ゼミナールにおいて、スタッフ・ポートフォリオの作成やメンターを経験。

清水 栄子（愛媛大学教育・学生支援機構 講師）

安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了（博士（教育学））。2015 年 4 月より現職。愛媛大学、教育利用拠点等でアカデミック・アドバイジングや学習支援に関わる研修を担当。著書に『アカデミック・アドバイジングーその専門性と実践ー』（単著）がある。教職員能力開発拠点 S D C / S P O D - S D C。

### ■プログラム概要

スタッフ・ポートフォリオ（以下、「SP」という。）は「職員業績記録」とも呼ばれるように、職員としてのキャリアを振り返り、自身の業務内容や業績等をまとめ、可視化したものです。

SP は職員の人材育成や職員によるキャリア形成、組織と職員個々のベクトルの確認などに活用されています。この研修では、SP の構成や実際の活用事例などを紹介し、SP についての理解を深めていきます。実際に SP の一部を作成していただくワークを準備しています。このワークでは、「キャリア形成」に焦点を当て、参加者ご自身の将来像（今後のキャリア）について考えていただく時間にしたいと思います。

SP とはどのようなもの？ 所属大学に SP 導入を検討されている方のご参加をお待ちしています。「自分のこれまでを振り返りたい」「今後のキャリアについて考えたい」という方もぜひご参加ください。大学職員としてのキャリアを描くヒントにぜひ役立ててみませんか？

### ■主な受講対象

SP 作成に興味・関心のある、もしくは所属大学において SP を導入したいと考えている職員。

### ■本プログラムの到達目標

1. スタッフ・ポートフォリオとは何かを説明することができる。
2. スタッフ・ポートフォリオの効果を 2 つ以上説明することができる。
3. スタッフ・ポートフォリオ作成の体験を通じ、自身の将来像について考えることができる。

### ■日時・場所

日時：平成 30 年 8 月 29 日（水）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク・講義

プログラム番号 2902A

# 基礎から学ぶ学習評価法

### ■講師

佐藤 慶太（香川大学 大学教育基盤センター准教授）

平成 11 年 3 月高知大学人文学部人文学科卒、平成 21 年京都大学にて博士（文学）の学位取得。平成 25 年度より香川大学大学教育開発センター（現・大学教育基盤センター）准教授。

### ■プログラム概要

現在、大学では「アクティブラーニング」が一つのキーワードとなっており、このキーワードのもとで、授業をどう変えていくべきかが、大学、そして個々の教員の課題となっています。その際、注意しなければならないのは、授業スタイルの変化にあわせて、評価の方法も変更していなければならない、ということです。授業スタイルが多様化していく中で、どのように適切な評価方法を選択していくのが良いのでしょうか。

この講座では、学習評価の基礎的な理論、授業方法と評価方法の対応のさせ方、さまざまな学習評価方法について、グループワークを交えて学びます。また、なるべく多くの評価事例に触れてもらうべく、参加者同士の情報交換の時間も取る予定です。この講座が、よりよい学習評価方法づくりの一助となれば幸いです。

### ■主な受講対象

学習評価を基礎から学びたいと考えている教員の方、また、さまざまな評価方法について知りたいと考えている教員の方。

### ■本プログラムの到達目標

1. 成績評価の学習支援機能について説明することができる。
2. 学習目標に応じた評価方法を選択することができる。
3. 代表的な評価方法の特徴について説明することができる。

### ■日時・場所

日時：平成 30 年 8 月 29 日（水） 13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 今さら聞けないICT利用による教育の意義と方法

### ■講師

林 敏浩（香川大学 学長特別補佐、創造工学部 教授、大学連携 e-Learning 教育支援センター四国 センター長、総合情報センター 副センター長、大学教育基盤センター ICT教育部長、四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 教授）  
平成元年3月徳島大学工学部情報工学科卒業、平成6年徳島大学にて博士（工学）の学位取得。平成6年より佐賀大学理工学部講師、平成17年より香川大学総合情報基盤センター准教授、平成25年より香川大学総合情報センター教授。教育工学を専門として、大学全体の教育支援システムを含むコンピュータ・ネットワークシステムの導入、運用、管理、利活用支援まで広範に担当。

### ■プログラム概要

近年、大学を含む各種教育機関ではICTを利活用した教育・学習方法（電子教具の利用、遠隔会議システムによる遠隔講義、LMSを活用した非同期型学習環境の提供など）が積極的に導入されています。このような状況では当たり前のように、そして、何の抵抗もなくICTが教育の中に入ってきています。もちろん、ICT利活用によって教育・学習が改善されたという話も多くあります。

しかし、ここであえて問いかけたいと思います。我々が行っているICTを利活用した教育は本当に良いのでしょうか。あるいは、そういう問題意識を持ってICTを教育に利用すべきかどうか判断されていますでしょうか。本プログラムはこのようなアンチテーゼ的な視点で講義を展開しようと思います。そして、今さら聞けないICT利用による教育の意義と方法を参加者の皆さんとディスカッションしたいと思います。

### ■主な受講対象

ICTを利活用した教育・学習方法を取り入れた授業をしているがなんとなくしっくり来ない、あるいは、導入を考えているがよくわからないという教員の方を歓迎します。また、教育に関わるコンピュータ・ネットワークシステム導入に関わる教職員の方々も歓迎します。

### ■本プログラムの到達目標

1. なぜ、ICTを教育・学習に取り入れるのか、その理由が説明できる。
2. ICTを利活用した教育・学習方法の善し悪しを自分の観点で説明できる。
3. 大学教育に必要なコンピュータ・ネットワークシステムの要点が説明できる（特に、教育に関わるコンピュータ・ネットワークシステム導入に関わる教職員の方々）

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 講義中心

プログラム番号 2902C

### 大人数講義のコツ

#### ■講師

小林 直人（愛媛大学 学長特別補佐、教育・学生支援機構 教育企画室長、医学部 総合医学教育センター長 教授）

昭和 63 年 3 月東京大学医学部医学科卒、平成 7 年東京大学にて博士（医学）の学位取得。平成 17 年度より愛媛大学医学部教授、平成 21 年度より愛媛大学教育・学生支援機構副機構長と教育企画室長を兼任。教育担当理事（教育・学生支援機構長）のもと、大学全体のFDをミクロ・レベルからマクロ・レベルまで幅広く担当。平成 27 年度より愛媛大学学長特別補佐（教育企画、能力開発）を兼任。

#### ■プログラム概要

「よい講義」をここでは、聞き手の学生にとって分かりやすく、知的な緊張感があり、さらに学生が参加する（した気にさせる）講義、ということにしておきます。大人数での講義にはデメリットも多いのが事実ですが、現在の高等教育の実情を考えればこのような授業形態は不可欠です。大講義室でも学生とコミュニケーションを取る方法、学生を積極的に講義に参加させる方法や学習効果を高める方法など、大人数の学生を聴衆とした「よい講義」をするために気をつけておくべき授業スキルを、実例や実習を通して習得することができます。

また昨今の高等教育に強く求められている参加体験型授業/アクティブラーニング型授業の一例として、受講者に実際にグループワークを体験していただきます。講義を受け持つようになって間もない教員の方はもちろん、自分の講義を振り返りたいと思われる方、また職員の方々も是非受講してください。

この研修では、参加者の皆さんが日頃実践している工夫も披露して頂きます。ご自分の経験（失敗談も歓迎です！）や他で見聞きした実践例を共有しましょう。きっと、明日の授業に役立つヒントが見つかります。

#### ■主な受講対象

まだ講義経験がないか数年未満の講義経験しかない教員の方を歓迎します。また、学務系の職員の方にとっては、大学の講義に今求められていることについて考えるよい機会になると思います。

#### ■本プログラムの到達目標

1. 学生にとってよい講義とはどのようなものかを具体的に説明できる。
2. 自分の経験に基づいて、大人数講義のメリットとデメリットを列挙することができる。
3. 「学生中心の大学」の実現のためによい講義ができるようになる。
4. 大講義室ならではの様々な授業スキルを、実際の体験を通して習得し自分の授業に生かすことができる。

#### ■日時・場所

日時：平成 30 年 8 月 29 日（水）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

プログラム番号 2902D

## 図書館員のためのアジア諸国情報の調べ方 ー留学生に対する図書館利用支援ー

### ■講師

廣田 美和（国立国会図書館 関西館 アジア情報課 副主査）

平成13年から国立国会図書館に勤務。文献提供業務や図書館協力業務等に従事し、現在は関西館アジア情報課で韓国・北朝鮮関連資料の収集・整理・提供及びアジア情報全般に関するレファレンス業務などを行っている。平成29年度に国立国会図書館主催『レファレンス・サービス研修』において「日本語・英語で調べるアジア諸国の統計」の実習を担当した。

玉岡 兼治（聖カタリナ大学 図書課 課長）

平成2年から聖カタリナ女子大学（当時）図書課に勤務。現在は図書課事務総括のほか、実務として・ILL・図書館利用指導担当。学生の図書館利用指導については、画一的な説明ではなく、学生の実態や理解度に沿い、学生各自が使い方の分かる方策・実践について着任以来取り組んできた。平成20年度国立情報学研究所学術情報リテラシー教育担当者研修修了。平成22～23年度SPOD次世代リーダー養成研修受講（1期生）平成24年1月修了。

三浦 さゆり（愛媛大学 図書館事務課 調査企画チームリーダー）

平成11年度から愛媛大学（図書館）に勤務。平成29年度から参考調査・情報リテラシー教育支援等担当。平成17年度国立情報学研究所学術情報リテラシー教育担当者研修修了。平成23～24年度SPOD次世代リーダー養成研修受講（2期生）平成25年1月修了。

### ■プログラム概要

良い図書館とはここでは、利用者に適切な資料を紹介、供することのできる図書館ということにします。急増する留学生は、卒業研究等に自国のことをテーマに選ぶことが多いように見受けられます。ところが日本で自国の資料を探す際には、その学生の情報リテラシー能力や、言語能力に差があることも原因し、日本人学生と同等の図書館サービスが受けにくい、という問題点があります。また、図書館の対応も一人一人異なった対応を取らないとならないため、時間はかかる上に、加えて図書館員も未経験な分野で対応が難しい、ということが多くの大学図書館で見られます。

そこで、本プログラムでは第1部で留学生に対して自館が取り組んでいる事例や悩みを共有し、第2部で国立国会図書館講師派遣型研修の協力を受け、日本語と英語でアジア諸国の情報を調べる方法の紹介・実習を行います。現地語の知識がなくても問題ありません。

### ■準備物や事前課題

受講者は自館での対留学生支援業務でどのような問題があるか、簡単にまとめておいてください。無線LANが利用できる端末（PC、タブレット等）を持参してください。アクセスポイントは会場で用意します。

### ■主な受講対象

図書館職員

### ■本プログラムの到達目標

1. インターネットから日本語と英語で効率よく正確なアジア情報を得る方法を知ることができる。
2. 留学生に対する自館の対応を改善することができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 2902E

# 若手職員のためのキャリア形成入門

### ■講師

藤巻 晃（徳島文理大学 地域連携センター 係長）

平成 11 年徳島文理大学に入職、総務部・入試広報部・地域連携センターで勤務。平成 26・27 年度に SPOD 次世代リーダー養成ゼミナールを受講・修了。これまでに SPOD 研修講師として 5 回登壇し、若手職員の育成に取り組んでいる。平成 28 年度 SPOD-SDC 認定。

### ■プログラム概要

キャリアとは、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」と定義されています。

大学を取り巻く状況は年々厳しさを増しており、大学職員の業務は質・量ともに増加しています。また、社会環境の変化とともに、学校教育においてはキャリア教育が取り入れられています。

このプログラムは、大学等の職員として働き始めてある程度経ったみなさんが過去を振り返り、自身の興味や適性を確認して参加者間で共有することによって、これからの自身のキャリアを考える機会とするものです。

自分を知り、参加者の皆さんと一緒にこれからの自分のキャリアを考えてみましょう。

### ■主な受講対象

採用 10 年程度までの若手職員で、キャリアについて考える時間を持ちたい職員の方。

### ■本プログラムの到達目標

1. キャリアを考える必要性を説明することができる。
2. 自身の興味・適性・能力（キャリア・アンカー等）を知り、他者に説明することができる。
3. これから自身が必要な行動（アクション）を作成することができる。

### ■日時・場所

日時：平成 30 年 8 月 29 日（水） 13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## SD担当者研修 —戦略的な人材育成をするために—

### ■講師

吉田 一恵（愛媛大学 教育学生支援部 愛媛大学SD統括コーディネーター／能力開発室長）

愛媛大学法文学部法学科卒業。文部事務官として愛媛大学各部局、国際交流センターにおいて主に総務、国際交流を担当。法人化を挟み、広報室長、人事課長、教育学生支援部長を経て平成29年4月から現職。広報室・人事課での約6年間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、主に人材育成・評価、労務、男女共同参画、人権侵害事案等々に対応、全事務系職員へのスタッフ・ポートフォリオの導入も実施、教育学生支援部では、入学から就職までの学生支援活動、危機管理事案に対応するとともに、現在まで一貫して教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDCとして職員の能力開発に取り組んでいる。

久保 秀二（愛媛大学 医学部 人事労務課長）

平成7年愛媛大学事務職員に採用、高知大学、弓削商専高専の勤務を経験後、愛媛大学に復帰。主に人事、人材育成、労務、給与の業務に従事しながら研修講師も幅広く担当。平成29年4月から現職。（教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDC）

### ■プログラム概要

SD担当者として、SDに関する大学設置基準等の一部を改正する省令（平成28年3月31日）「SDの義務化」を理解するとともに、戦略的な人材育成をするため必要なSDを企画・運営・評価する基礎的な知識と技能の習得を目的としています。

また、参加者間で様々な工夫を共有することをとおして、参加者が自大学において活用できる実践的な知識を身につけます。

### ■準備物や事前課題

自大学におけるSD実施要項関連書類があれば事前に提出してください。

### ■主な受講対象

1. SDを担当する教職員
2. SDを担当する予定の教職員
3. SDを担当することに関心のある教職員

### ■本プログラムの到達目標

1. SDに関する大学設置基準等の一部を改正する省令（平成28年3月31日）の概要を説明することができる。
2. SDとは何かを説明することができる。
3. SD担当者に求められる能力と役割を挙げることができる。
4. SDを企画・運営・評価するための手順を説明することができる。
5. SDを企画・運営・評価するための工夫を共有することができる。
6. SD担当者間の仲間づくり、ネットワークづくりをする。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）13：00～17：30

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 学生参加型授業の技法

### ■講師

西本 佳代（香川大学 大学教育基盤センター 能力開発部 講師）  
広島大学教育学部第五類教育学系コース卒業、同大学院教育学研究科教育学専攻博士課程前期修了、同研究科教育人間科学専攻博士課程後期退学。平成20年より香川大学教育・学生支援機構の特命助教として勤務。山口福祉文化大学（現・至誠館大学）ライフデザイン学部講師を経て、平成27年4月より現職。専門は教育社会学。

### ■プログラム概要

本プログラムは、これから学生参加型授業の技法を取り入れようと思っている教員を対象としています。近年、アクティブラーニングの導入が求められる機会が多くなり、新たに挑戦してみようと思われる先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。けれども、実際に導入すると、グループワークが単なるおしゃべりの時間になったり、知識の伝達が不十分に終わったり等、学生参加型授業の難しさに直面することも多々あります。

このプログラムでは、そもそもアクティブラーニングとは何なのかという定義にはじまり、導入の背景、メリット・デメリット等の基礎的な内容について扱う他、取り入れやすい学生参加型授業の技法をご紹介します。その技法のいくつかを体験しながら、ご自身の授業への導入を検討していただければと考えています。

### ■主な受講対象

学生参加型授業の技法を取り入れようと思っている教員。本プログラムでは基礎的な技法を扱いますので、特に授業経験の少ない教員の方を歓迎します。

### ■本プログラムの到達目標

1. アクティブラーニングとはどのようなものか、説明することができる。
2. 学生参加型授業の技法を3つ以上挙げて、その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に学生参加型授業の技法を導入することができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）15：30～17：30

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 学生のためのキャリア形成支援

### ■講師

岡 靖子（愛媛大学 教育学生支援部 就職支援課長）

愛媛大学大学院法文学研究科修了。九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻博士後期課程在籍(教育社会学)。食品メーカー研究室勤務を経て1990年より教育研修の企業に所属し社員研修に従事。2004年よりキャリアカウンセラーとして、大学、行政機関においてキャリアガイダンス、キャリアカウンセリング、メール相談事業などを担当。2011年より愛媛大学教育・学生支援機構学生支援センター研究員としてキャリア教育・キャリア支援を担当し、2015年4月より現職。

### ■プログラム概要

社会で貢献できる人材育成や卒業時の就職問題は、近年、大学における学習のラーニングアウトカムとして重要な指標とされています。多くの大学で独自のキャリア支援・就職支援が熱心に行われ、その内容も正課の授業、正課外のセミナー、応募に関する個別支援、インターシップなど様々です。また、支援の内容もより実践的な手法が用いられ、地域の企業や公的機関等との連携が広がり、学内の教員、職員のみならず、OB/OG、学外講師、キャリアカウンセラーなど様々な支援者により、職業に繋がる充実した支援を受けられる環境が整いつつあります。

このように多様で高度な支援が広がる大学のキャリアセンター・就職支援課は何を目指し何をすればいいのでしょうか。

本講座では、大学組織の視点からキャリア支援について考え、取り組むべき課題についてグループワークを通じて見つけていただきます。そして、新たな視点から、自大学の目標と組織の一員としての自身の課題を持ち帰ることを目標としています。

### ■主な受講対象

1. キャリア支援を担当している（担当したことのある）教職員
2. キャリア支援を担当したいと思っている教職員

### ■本プログラムの到達目標

1. 大学組織の視点からキャリア支援を考える必要性について説明できる。
2. 自大学のキャリア支援の課題について説明できる。
3. キャリア支援における自身の課題を持ち帰ることができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）15：30～17：30

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク・講義

プログラム番号 2903C

### 教職協働で学習支援に取り組む ー理想と現実のギャップを埋めようー

#### ■講師

清水 栄子（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師）

安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了（博士（教育学））。2015年4月より現職。愛媛大学、教育利用拠点等でアカデミック・アドバイジングや学習支援に関わる研修を担当。著書に『アカデミック・アドバイジングーその専門性と実践ー』（単著）がある。教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDC。

#### ■プログラム概要

この研修では、「学習支援」を単位修得のためのいわゆる学修に対する支援のみでなく、正課外活動も含めた学生の学びに対する支援と位置づけています。学生にこんな学習者になってほしいという願いをこめて、教職員による組織的、個別的な学習支援が行われています。しかし、実際には理想と現実のギャップにジレンマを感じる場面もあるのではないのでしょうか。

本研修は、参加者のみなさんによるディスカッションを中心に進めていきたいと考えています。まず、米国のアカデミック・アドバイジングを事例として、組織的な目標設定や担当者のコンピテンシーについて紹介します。その後、参加者の学習支援の実践状況、課題、成功事例等を共有します。また、参加者それぞれの所属大学での学習支援担当者の行動指針を考えていただきます。ディスカッションとワークを通して、明日からの実践でのヒントの提供を目指しています。

#### ■準備物や事前課題

所属大学での学習支援の実践が紹介できる資料があればご持参ください。

#### ■主な受講対象

学習支援センター等の組織的あるいは個別的に学習支援に取り組んでいる教職員

#### ■本プログラムの到達目標

1. 学習支援とは何かを自分の言葉で説明できる。
2. 所属大学での学習支援の現状を説明できる。
3. 所属大学における学習支援担当者の行動指針を作成できる。
4. 学習支援に関する多様な考え方や経験を尊重し、参加者間で共に学びあう雰囲気貢献できる。

#### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）15：30～17：30

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 大学職員のためのフィードバック入門

### ■講師

俣野 秀典（高知大学 地域協働学部／大学教育創造センター 講師）

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師を経て、2015年より現職。放送大学非常勤講師（ファシリテーション入門）。

教育評価や教育方法を中心に、“Educational Development”に取り組む。「私たちは楽しみながら可能性に気づいていく」をモットーに、高等教育開発の専門家として、学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるプログラムを開発・支援・実施しており、大学コンサル・教員コーチングの実績も多数ある。SPODフォーラムでは2010年よりプログラムを担当しており、2014年「大学人のためのリフレクション事始：人材育成研究・実践のフロンティアから考える」、2017年「学生が感じ、考え、それを学びにつなげる教育と学習支援」のシンポジストも務めている。

### ■プログラム概要

近年、1on1ミーティングやリアルタイムフィードバックなどが人材育成の手法として注目を集めています。これに伴い、職場でのフィードバックへの関心も高まっています。

そこで本プログラムは、短期間およびその場でのフィードバックを中心に取り上げ、その基本的な考え方を理解し、職場で活用できるようになることを目的に実施されます。

フィードバックにはコツがあります。アートではありません。そのコツを知ればフィードバックが相手のアクションに反映される確率がグッと高まります。そのために、数多く研究・実践されているフィードバック方法の中から、本講座では「Clean Feedback」の考え方をベースにしなが、コミュニケーションやコーチングといった広い視点からフィードバックを捉えていきます。

※タイトルに“大学職員”とありますが、短大や高専の職員の方、教員の方ももちろん歓迎します。

※本プログラムは、人事評価方法を扱うものではありません。

### ■準備物や事前課題

簡単な事前アンケートを実施する場合があります。

### ■主な受講対象

- ・フィードバックの必要性を感じている教職員
- ・部下指導を担当する職員
- ・コーチングに関心のある教職員

### ■本プログラムの到達目標

1. 効果的なフィードバックの特徴を説明できる。
2. フィードバックのための情報を収集できる。
3. 対象となる行為について、事実・推測・影響を区分できる。
4. 職場でフィードバックを活用するための準備ができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）15：30～17：30

場所：香川大学幸町北キャンパス

プログラム番号 2903E

若手職員に知ってもらいたい『報・連・相』のコツ  
—もっと良くなる職場内コミュニケーション—

■講師

宮内 卓也（高知大学 法人企画課法人企画係 係長）

平成 15 年 4 月高知大学採用。総務系・知的財産・研究推進担当等を経て、平成 24 年から現職。高知大学 38 年ぶりの新学部（地域協働学部）をはじめとした 4 学部・1 専攻の設置・改組等の業務などを担当。

井村 公一（高知工科大学 学生支援部学生支援課 課長代理）

平成 19 年 10 月高知工科大学採用。財務部・監査室・学生支援部就職支援課を経て、平成 26 年から現職。主に、学生の経済的支援や課外活動支援、地域交流に関する業務を担当。

大塚 陽介（愛媛大学 基金室基金チーム チームリーダー）

平成 14 年 10 月愛媛大学採用。学務系・総務系・人事系の職歴を経て現職。平成 28 年度に設立された「愛媛大学基金」の初代担当チームリーダーとして、営業活動（企業訪問）の日々。

※3名とも、大学等の経営を担うために必要な知識・技能・態度を身につけるためにSPODが実施した「次世代リーダー養成ゼミナール」の第3期（平成24～25年度実施）修了生です。上記プログラム修了後は、これまでSPODで実施された数々のSD研修で講師を務めています。

■プログラム概要

「ホウレンソウ」という言葉をご存じですか。

これは報告・連絡・相談の略称で、基本的な事柄ですが、業務を円滑に進める上でとても大切なものです。しかし、適切な「報・連・相」が行われなかったことにより、業務に支障をきたしている例が多く見受けられます。例えば、連絡・報告をしたのに、「相手にうまく伝わっていなかった」「上手く相談に乗ってもらえない」といったことはないでしょうか。

このプログラムは、主に若手職員対象に「報・連・相」のコツを理解し活用することで、コミュニケーションに関する課題を解決する方策を立てることを目的としています。

職場における円滑なコミュニケーションのために小さな一歩を踏み出してみませんか。

なお、このプログラムは、「SPODフォーラム2013」において次世代リーダー養成ゼミナール第3期生が実施したプログラムをベースにしています。

■主な受講対象

30歳未満の若手職員

■本プログラムの到達目標

1. 効果的な報告・連絡・相談の方法を説明することができる。
2. 効果的な報連相を使って、コミュニケーションに関する課題を解決する方策をたてることができる。

■日時・場所

日時：平成30年8月29日（水）15：30～17：30

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 3001A

# シラバス・授業を改善しよう！

### ■講師

葛城 浩一（香川大学 大学教育基盤センター 能力開発部 准教授）  
平成 12 年 3 月広島大学教育学部教育学科卒、平成 22 年広島大学にて博士（教育学）の学位取得。平成 20 年度より香川大学大学教育開発センター（現・大学教育基盤センター）准教授、平成 21 年度より香川大学大学院教育学研究科を兼任。

佐藤 慶太（香川大学 大学教育基盤センター 能力開発部 准教授）  
平成 11 年 3 月高知大学人文学部人文学科卒、平成 21 年京都大学にて博士（文学）の学位取得。平成 25 年度より香川大学大学教育開発センター（現・大学教育基盤センター）准教授。

西本 佳代（香川大学 大学教育基盤センター 能力開発部 講師）  
平成 18 年 3 月広島大学教育学部第五類教育学系コース卒、平成 20 年 3 月同大学院教育学研究科教育学専攻博士課程前期修了、平成 20 年 9 月同研究科教育人間科学専攻博士課程後期退学。平成 27 年度より香川大学教育基盤センター講師。

### ■プログラム概要

この講座では、「学生の学びを促すシラバスの書き方」「基礎から学ぶ学習評価法」「学生参加型授業の技法」の 3 講座で学んだことを活用し、ご自身のシラバス・授業を改善できるようお手伝いします。FD の講座でいくら学んだとしても、それをアウトプットしなければ、授業改善には結びつきません。本講座では、初日の 3 講座で学んだ知識を、実際の授業改善に活用できるよう支援します。具体的には、講座の時間内にご自身のシラバスを修正、授業計画を作成していただき、ルーブリック評価表を用いて、グループのメンバーで相互評価していただきます。グループのメンバーの視点や、スタッフのサポートを通して、よりご自身の理想に近いシラバス・授業をつくりあげていきましょう。

なお、本講座は SPOD フォーラム 2018 の「学生の学びを促すシラバスの書き方」「基礎から学ぶ学習評価法」「学生参加型授業の技法」の 3 講座を受講した方のみを受講対象とします。また、パソコンとシラバスの持参をお願いしています（詳細は下記参照）。

### ■準備物や事前課題

講座の時間内にシラバスと授業計画の修正を行いますので、パソコンを持参してください。また、事前に指定のフォーマットをお送りしますので、そこにご自身のシラバスを入力してお持ちください（紙媒体でなく、データの状態でかまいません）。

### ■主な受講対象

「2901A 学生の学びを促すシラバスの書き方」「2902A 基礎から学ぶ学習評価法」「2903A 学生参加型授業の技法」の 3 講座を受講した方のみを受講対象とします。

### ■本プログラムの到達目標

1. 適切な目的・目標設定ができるようになる。
2. わかりやすいシラバスが書けるようになる。
3. 目的・目標にあった授業方法を選択できるようになる。
4. 目的・目標にあった成績評価方法を選択できるようになる。
5. 学生参加型のグループ作業を、自らの授業で導入できるようになる。

### ■日時・場所

日時：平成 30 年 8 月 30 日（木）10：00～15：00  
場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 3001B

# 大人数でも進度を落とさずアクティブラーニング ーTBLと言う反転授業のやりかたー

### ■講師

立川 明（高知大学 大学教育創造センター 准教授）

S62年高知大学理学部卒。H10年九州大学にて博士（工博）の学位取得。H2年より高知大学理学部化学科助手。計算化学と情報処理の教科書執筆。H16年より大学教育創造センター准教授。参加型授業の開発、担当。実践をふまえたアクティブラーニングに関するFD研修講師学内外で多数担当。アクティブラーニングの成果をまとめたTips執筆。

### ■プログラム概要

グループワークを取り入れてみたけどどうまくいかず悩んでいませんか？ 知識獲得のための授業なのに、どうやってグループワークをやったら良いのか困っていませんか？

TBL（チーム基盤型学修）は知識獲得に適した能動学修の手法です。受講生が多くてもアクティブラーニング初心者でも失敗しない手法です。しかも成績が上がり同時にコミュニケーション能力も高められます。

以下の順序で進める予定です。

1. グループの作り方
2. アイスブレイキング
3. I R A T（個別準備確認試験）
4. G R A T（グループ準備確認試験）
5. 良い問題の作り方（ミニレクチャー）
6. ふりかえり

### ■準備物や事前課題

Tips 5 を事前に読んで下さい。

(<http://www.kochi-u.ac.jp/daikyo/publication/tips.html>)

### ■主な受講対象

TBLを使ってみたい教員。

講義をアクティブに変えたい教員。

成績を上げたい教員。

同時学修で学生の評価的思考力、サイエンスコミュニケーション力を高めたい教員。

### ■本プログラムの到達目標

1. 予習に始まるTBLの流れを同僚に説明できる。
2. 良い問いの条件3つを説明できる。
3. 自分の授業でTBLを行うための準備ができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月30日（木）10:00～12:00

場所：香川大学幸町北キャンパス

■講師

塩崎 俊彦（高知大学 大学教育創造センター 教授）

昭和 62 年 3 月、上智大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専攻、日本文学。2007 年より高知大学大学教育創造センターで、FD 研修プログラムの作成・実施や授業支援に取り組む。総合科学系地域協働教育学部門教授。

■プログラム概要

本年度の SPOD フォーラムのテーマ、「教職員のミニマムエッセンシャルズを考える」に合わせて、いつもの経験学習を中心としたセッションを少し模様替えしました。経験から得られた気づきをもとに次のアクションを起こす、という考え方について、「プロセスに着目する」ということに焦点をあてます。「教職員のミニマムエッセンシャルズ」について話し合うグループワークと、「話し合いのプロセス」についての振り返りを通じて、経験のプロセスを見ることが、気づきを得るための振り返りについて、体験を通じて理解していただくことをめざしています。

1. オリエンテーション
2. グループワーク：30 分程度の課題達成型のグループワークを行います。
3. グループワークの振り返り
4. ミニ講義：「経験、プロセス、振り返り」

■主な受講対象

- ・授業にアクティブラーニングの要素を導入している／しようと思っている教員
  - ・振り返りを職場の業務に活かしている／活かしてみたいと思っている職員
  - ・インターンシップなど課外の取組を学生の成長に活かしたいと思っている教職員
- \* 2 時間の研修のほとんどがグループワークとなりますので、あらかじめご了承ください。

■本プログラムの到達目標

1. 大学生や大学職員に求められる能力について、理由とともに 3 つ説明できる。
2. 「話し合いのプロセス」に注目するために意識しなければならないことを説明できる。
3. プロセスについての気づきを本日の経験から説明できる。

■日時・場所

日時：平成 30 年 8 月 30 日（木）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

プログラム番号 3001D

**教学IRデータを適切に取り扱うために  
—組織または個人でできることを考える—****■講師**

竹中 喜一（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 特任助教）

平成16年3月大阪大学人間科学部卒業後、民間企業でのSE等の業務を経て、平成20年関西大学入職。入職後から10年間FD、SD、教学IR等を担当。業務と並行して名古屋大学大学院で高等教育論、大阪大学大学院で教育工学を専攻し、大学職員論をテーマに研究。博士（人間科学）。平成30年4月より現職。

**■プログラム概要**

教学IRを進めるにあたって、学内にあるデータの収集や活用は不可欠です。その収集や活用にあたっては適切にデータを取り扱う必要があります。その理由には少なくとも「個人情報漏洩などのリスク回避」、「データを取り扱う組織が信頼できることの明示」といったものがあります。

本研修ではまず、その必要性について確認したうえで、データを適切に取り扱うための①基本的なルールや留意点、②個人でできること、③組織的に行うこと、を中心に扱います。講義での知識習得とワークを通じて、所属する組織においてデータの取扱が適切かを確認したり、取扱を改善したりするヒントを得る機会としたいと思います。

本研修は、主に教学IRの実務担当者を対象と想定していますが、学内にあるデータを取り扱う部署（例：情報システム部門や総務・企画系部門、教務・学生支援部門の職員）でテーマにご関心をお持ちの方の受講もお待ちしております。

**■準備物や事前課題**

所属部署あるいは大学におけるデータの取扱に関連する文書（規程、ガイドライン）の内容についてお尋ねしますので、予め確認をお願いします。

**■主な受講対象**

- ・教学IRの実務を担当する職員
- ・学内にあるデータを取り扱う部署の職員

**■本プログラムの到達目標**

1. データを適切に取り扱うための基本的なルールや留意点を説明できる。
2. データを適切に取り扱うために求められる姿勢と行動を説明できる。
3. 所属大学でのデータの取扱のすぐれた点と課題を列挙することができる。
4. 所属大学でのデータの取扱の改善を提案できる。

**■日時・場所**

日時：平成30年8月30日（木）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## トップリーダーセミナー

## 「管理職のための、新たな入試・学生募集・高大接続を考えるセミナー」

## ■講師

福島 一政（追手門学院大学 副学長・教授、愛媛大学 客員教授、福井大学 監事）

1972年3月立命館大学経済学部卒、2001年日本福祉大学常任理事・事務局長、2003年同大学学長補佐兼務、2009年東邦学園理事、2010年愛媛大学監事、2012年同大学客員教授・福井大学監事、2013年追手門学院大学副学長、2014年追手門学院理事（～2018年3月）、2018年同大学教授兼務、2005年大学行政管理学会会長（～2007年）。私立の3大学、国立2大学で役員として勤務し、大学経営・運営・教学など全般的に担当。

## ■プログラム概要

大学教育、高校教育、高大接続の一体的改革が求められ、2021年度入試からは新たな「大学入学共通テスト」が実施されることになっています。このテストについては、記述式問題と英語の四技能の導入ばかりが注目されていますが、高大接続システム改革会議ではもう少し深い議論がされていたように思います。横並びの「改革」を目指すのではなく、高校生や高校教師の実態や自大学の学生の実態を知り、「学力の三要素」を育成し評価する仕組みを考えることが必要だと考えています。とりわけ「分厚い中間層」といわれる学生層を受け入れている大学はそのことが強く求められていると思います。

本プログラムでは、以上のことを踏まえて、これからの大学入試、学生募集、高大接続のあり方について、「成長」をキーワードに、追手門学院大学のアサーティブプログラム・アサーティブ入試の事例を解説しつつ、今後の方向性へのヒントを提供したいと考えています。

## ■主な受講対象

入試・学生募集・高大接続の全部あるいは一部の業務の責任を担っている方。  
もしくは、これらの業務に強い関心を持っている方。

## ■本プログラムの到達目標

1. 高校生や高校教師の実態について説明できる。
2. 自大学の学生実態を把握・分析して、入試、学生募集、高大接続の改革に活かすことができる。
3. 学生や高校生の「成長」を意識した制度改革を考えることができる。

## ■日時・場所

日時：平成30年8月30日（木）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 理工系講義形式授業における1回の授業デザイン

### ■講師

榊原 暢久（芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター／工学部 教授）  
北海道教育大学（札幌校）小学校教員養成課程卒業。北海道大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得退学。博士（理学）。旭川工業高等専門学校、茨城大学工学部を経て、2007年度より芝浦工業大学工学部准教授。2009年4月より現職。ファカルティ・ディベロップメント、教職員能力開発拠点SDC。日本高等教育開発協会、大学教育学会、日本数学教育学会等所属。専門は高等教育開発（特に、理工系数学基礎教育や教員支援（FD）プログラム）。

吉田 博（徳島大学 総合教育センター 講師）  
愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009年度から徳島大学で全学FDプログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）のFD担当として、SPOD-FDプログラムの企画立案、調査研究に携わる。  
日本高等教育開発協会、大学教育学会、初年次教育学会等所属。

### ■プログラム概要

理工系の専門的知識の習得や研究を行っていく上で基盤となるのは、各学科の必須科目等で学ぶ基礎知識です。基礎知識を習得するための基礎科目の授業は、大人数、講義形式によって行われることが多くあります。本プログラムでは、このような理工系基礎科目における講義形式授業の中で、学生の主体的な学びや授業外学習を促進することに繋がるひと工夫を取り扱い、参加者自身が実際担当している授業のうち、ある1回分の授業設計を作成します。具体的には、授業で学生に達成してほしい到達目標を設定し、ワークシートをもとに「導入」、「展開」、「まとめ」の構成で授業計画を作成します。プログラムの中で、インストラクショナルデザインの理論や、実際に取り組まれているより身近な実践事例を紹介し、講義と参加者同士のワークを行いながら進めていきます。参加者のみなさんがアイデアを持ち寄ることで、自身の授業における課題解決のヒントや、今後の新しい実践のヒントが見つかることを期待しています。

### ■準備物や事前課題

参加者が担当する講義科目のシラバス1つ（講義を担当されていない教職員の方は、自校で実施している理工系講義科目のシラバス1つ）を持参のこと。

### ■主な受講対象

- ・自身の理工系の講義形式授業の中で実施できる、広い意味でのアクティブラーニングの手法を知りたい教員
- ・自身の理工系の講義形式授業の中で行っているアクティブラーニングの取り組みを他の教員と共有し、改善のヒントを得たい教員
- ・自身の理工系の講義形式授業を振り返り、基礎的な再構成の方法を知りたい教員

### ■本プログラムの到達目標

1. 理工系講義形式授業における1回の授業デザイン方法を修得することができる。
2. 理工系講義形式授業における自身の取り組みを振り返り、成果や課題、改善点を明らかにすることができる。
3. 理工系講義形式授業の取り組みについて他者と話し合うことで、自身の授業における課題解決のヒントを得ることができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月30日（木）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 初年次教育におけるシナリオ型PBLの実践

### ■講師

吉田 香奈（広島大学 教育本部 准教授）

1999年広島大学大学院教育学研究科博士課程後期単位取得退学。広島大学高等教育研究開発センター、山口大学大学教育センターを経て、2012年より現職。専門は高等教育論・教育行政学。広島大学人材育成推進室FD部会員として新任教員研修プログラムの開発・実施を担当。

### ■プログラム概要

PBL（Problem-based Learning、問題基盤型学習）とは、事例から問題を発見し、個別学習・グループ学習を通じて問題を探求していく学習方法です。教員から学生に課題として示される事例には、文献、論文、雑誌、記事、シナリオ、動画、写真等があります。

本研修では、特に初年次学生向けのシナリオを用いたPBLの授業を体験していただきます。また、グループ学習のファシリテーションの方法、評価手法、シナリオの作り方についても学びます。

PBLを用いた初年次ゼミを受講した学生からは「高校では討論やグループ発表のような活動がほとんどなかったので新しい経験だった。仲間の発表を見て学ぶこともあり、受講できて良かった」「通常の授業とは異なる授業だったので非常によい刺激になった」といった意見が寄せられています。

PBLにご興味をお持ちの方ならどなたでも受講いただけます。奮ってご参加ください。

### ■主な受講対象

PBLに関心のある教職員

アクティブラーニングに関心のある教職員

### ■本プログラムの到達目標

1. PBLとは何かを説明できる。
2. PBLを取り入れた授業の方法を知っている。
3. PBLのファシリテーションの方法を知っている。
4. PBLで使用するシナリオの作成方法を知っている。
5. PBLの評価方法を知っている。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月30日（木）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク・講義

プログラム番号 3002C

### 中堅教員のための研究指導講座 (大学生の卒論作成を支援する方法)

#### ■講師

近田 政博（神戸大学 大学教育推進機構 教授）

平成2年、名古屋大学教育学部卒、平成7年、名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程を満期退学し、名古屋大学教育学部助手（比較国際教育学講座）。平成10年、同大学に新設された高等教育研究センターの専任講師。のち助教授、准教授。中井俊樹氏（現愛媛大学）と16年間にわたり、ピンチの連続を綱渡りで切り抜けながら、大学教授法や各種FD・SDプログラム等の開発に従事。平成15年、博士（教育学、名古屋大学）。平成18年、同大学大学院教育発達科学研究科を兼任（高等教育学講座）。平成26年4月、神戸大学大学教育推進機構教授（大学院国際協力研究科教育協力論講座兼任）に異動。平成27年、同大学大学教育推進本部副本部長、全学評価・FD委員長（現在に至る）。神戸大学では全学の教学マネジメント、FD、教育評価、学修支援等を担当。

#### ■プログラム概要

本プログラムでは学士課程におけるゼミ・研究室教育の質を高めることを目的とします。日々の研究指導において、指導教員として果たすべき役割は何でしょうか。本プログラムでは、これを「卒業論文などの研究活動を通じて、学生が自律的な学び手となるのを支援すること」であると考えます。

日本の大学では授業改善についてはさまざまな工夫がなされてきましたが、ゼミや研究室運営、卒論・修論の指導については担当教員に一任されることが多く、実態がよくつかめていないのが現状です。しかし、いったん大学教員として採用されると、多くの場合は指導教員として学生を受け持ち、学位論文、就職支援などに大きな役割と責任を果たすことになります。

多くの大学で行われている日常の研究指導は、ゼミや研究室のメンバー全員に対して一斉に行う指導と、個々の学生のニーズや特性に応じて行う個別面談の組み合わせと言えます。授業では教員は学生を主導する立場にあるのに対して、研究指導では学生の研究を側面から支援する立場にあります。本プログラムでは、指導教員としての学生との接し方、研究室の日常的な運営、個別面談や集団指導の方法を扱います。

#### ■準備物や事前課題

これまでご自身がどのような研究指導を受けてきたかを振り返ってみてください。

#### ■主な受講対象

- ・これまで大学で授業を担当した経験はあるが、指導教員として学生の論文指導を行った経験のない（少ない）大学教員
- ・指導教員として、学生への研究指導に失敗した経験をもつ大学教員（私自身もたくさんの失敗をしています）
- ・ゼミや研究室での教育、研究指導に関心のある大学教職員

#### ■本プログラムの到達目標

1. 授業と研究指導の本質的な違いを説明することができる。
2. 学生の多様性に配慮しながら、教員として学生と信頼関係を築くための方法を理解し、説明することができる。
3. 自分のゼミ・研究室運営の方針を具体的に表現することができる。
4. 卒論・修論指導をする上で、実現可能な計画や倫理的な配慮について説明することができる。

#### ■日時・場所

日時：平成30年8月30日（木）13:00～15:00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク・講義

プログラム番号 3002D

# 人材育成のための人事評価 ー評価からパフォーマンス・マネジメントへー

### ■講師

阿部 光伸（愛媛大学 教育・学生支援機構 講師）

東北大学大学院教育学研究科修了。専門学校での15年の教員生活を経て、平成15年度から東北文化学園大学に勤務し学生課長、教務部長、学園事務局部長として人事評価を経験。現在、職場内人材育成をテーマにSDを担当。平成25年10月から現職。教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDC。

### ■プログラム概要

高等教育機関においても人事評価の必要性／重要性が謳われて久しいですが、“人事評価に時間を掛けることが出来ない／公平・納得性のある評価が出来ているか不安／形骸化している”といった悩みを多く聞きます。

そこで、今回の人事評価研修では、人事評価が人材育成の一手法であることを紹介するとともに、能力や行動の評価に基づく本人へのフィードバックを行い、組織の活性化と個人の成長を促すために有効な手段（パフォーマンス・マネージメント）となりうることを紹介します。

なお、受講者の皆様にはワークを通じて部下の育成・指導・評価のポイントを理解していただき、能力開発を促す手法を身に付けていただきます。

### ■主な受講対象

課長相当職の職員を主対象としますが、人材の育成・指導・評価について関心がある方の受講も歓迎します。

### ■本プログラムの到達目標

1. メンバーの育成・指導・評価のポイントを説明できる。
2. メンバーの特性に応じた目標達成プロセスへの関わり方、支援の仕方を説明することができる。
3. 人材育成につながる評価を行うことができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月30日（木）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

プログラム番号 3002E

トップリーダーセミナー  
「大学アイデンティティの共有と教員・職員の役割  
—大学を考え、自校を知り、ミッションを実現する—」

## ■講師

寺崎 昌男（東京大学・桜美林大学・立教大学 名誉教授）

1967年東京大学大学院教育学研究科修了。教育学博士。東京大学で初めて大学史研究で博士学位を取得しました。立教大学文学部・東京大学教育学部を経て桜美林大学大学院に勤務し、東京大学では百年史編集委員長・学部長、立教大学では全学共通カリキュラム運営センター部長、桜美林大学では大学アドミニストレーション専攻創設委員を勤め、大学教育を実践と歴史の両面から考え続けてきました。

## ■プログラム概要

FD、SDという営みは、しばしば通りのよい合言葉として語られます。しかし、(1)それらはなぜ「義務」なのか、(2)誰の義務なのか、(3)どうすれば「FDあるいはSDを行なった」ということになるのか、といった問題が真剣に考え抜かれたとはいえません。加えて(4)サバイバル時代を前に、大学自身が抱える深刻な課題とFD、SDとをどう結び付けばいいのか、(5)グローバル化と地域連携とが同時に求められる今日、特にSDの将来にはどのような試みが求められるか、ということは特に緊急な課題であると思われます。講義者はこれまで職員の能力開発のために最低限必要な勉強は何か、という問題を「大学リテラシー」という言葉で提案してきました。今回もそれを確かめた上で、新しい経験に基づく提案を行い、皆さんの検討を仰ぎたいと思います。

## ■準備物や事前課題

講義者の下記の2著を目にしておいてくださると理解が早いかもしれません。

寺崎昌男『大学自らの総合力Ⅱ』2015年 東信堂

寺崎・立教学院職員研究会(編)『21世紀の大学 職員の希望とリテラシー』2016年 東信堂

## ■主な受講対象

さまざまなレベルで「主任」「主事」「座長」「委員長」「センター長」といったリーダー役をさせられている方たちに適した内容になるかもしれません。しかしフレッシュマンの方たちも数年後には大学の運命を担う存在になるのですから歓迎します。

## ■本プログラムの到達目標

1. FDと言われる活動の目標をイメージすることができる。
2. ある活動が「SDをしている」という状態になるにはどのようなミニマムエッセンシャルズが必要なのかを明示することができる。
3. 大学改革の課題とFD・SDとの関連を、自分の言葉と論理で表明することができる。

## ■日時・場所

日時：平成30年8月30日（木）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

プログラム番号 3002F

**教職課程事務担当者の基礎力講座**  
**—教職課程事務の学び方と知識の活用方法—****■講師**

小野 勝士（龍谷大学 世界仏教文化研究センター事務部）

関西学院大学大学院法学研究科民刑事法学専攻博士課程前期課程修了。修士（法学）。平成13年度から龍谷大学に勤務し、教学部、経理課、文学部教務課を経験し、平成28年から現職。大学教務実践研究会代表。関連する著書に『教職課程事務入門【1】』（ジダイ社）がある。

**■プログラム概要**

教職課程事務は履修指導、実習関連、課程認定申請の許認可業務等多岐にわたります。そのため、複数の法令・基準等の知識が必要で、知識の集積・継承に課題を抱えている教務事務という側面を有しています。

教職課程事務担当者に求められるのは上記のような業務の円滑な運営と教員養成政策の動向をとらえた教職課程の改善活動にあると考えます。

本プログラムでは、教職課程事務の学び方を講師及び参加者同士で紹介しあい、学んだ知識の業務への活用方法をワークを通じて体験することで教職課程事務担当者としての基礎力向上を目指します。

※大学規模・免許状の種類にかかわらず、すべての大学・短大に共通する内容です。

1. 自己紹介（講師、グループ内のメンバー）
2. 教職課程事務の学び方（講義）
3. 参考書籍等の紹介（講師、グループ内のメンバー）及び発表（講義・ワーク）
4. 法令改正時の対応（教員の養成の情報の公表を例に）（ワーク）
5. 教員養成政策の動向～これまでの中教審答申のポイント～（講義）
6. 専門的知識を有する業務への取り組み方（講義）

**■準備物や事前課題**

- ・準備物：教職課程事務の知識を獲得するにあたって参考としている書籍の表紙、ウェブサイトのトップページ、勉強会チラシ等のコピー【グループ内で紹介していただきます。】
- ・事前課題：教員養成の情報の公表が2015年度から義務付けられました。公表にあたってどのような情報を学内で収集し公表内容を決定したのか調べてきてください。

参照通知文：「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令等の公布について（通知）」  
（26文科初第630号文書（平成26年9月26日付））

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/1368798.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1368798.htm)

**■主な受講対象**

教職課程事務を現在担当している（または過去に担当した）事務職員（経験年数は問いません）。

※教職課程事務を過去に担当したことのある事務職員の方は、申込みフォーム「備考欄」にその旨を記入してください。

**■本プログラムの到達目標**

1. 教職課程事務の学び方を理解し、他者に学び方を指導することができる。
2. 中教審答申における教員養成政策の方向性を理解し、他者に説明することができる。
3. 法令改正時の情報収集方法を身につけることができる。

**■日時・場所**

日時：平成30年8月30日（木）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

**大学教職員に今、何が求められるのか****■講師**

金子 元久（筑波大学 特命教授）

筑波大学特命教授、日本高等教育学会前会長、中央教育審議会専門委員、東京大学名誉教授、東京大学教育学部卒（1972年）。同大学院修士課程修了・教育学修士（1974年）、シカゴ大学Ph.D.（1985年）。東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長等を歴任。専門は高等教育論、比較教育学、教育経済学。主著は『大学教育の再構築』玉川大学出版会 2013年等。

山口 裕之（徳島大学 総合科学部 教授）

1999年東京大学人文社会系研究科単位取得退学。2002年博士（文学）取得。主要著書『「大学改革」という病』（明石書店）、『人をつなぐ対話の技術』（日本実業出版社）、『コピペと言われないレポートの書き方教室』（新曜社）など。

**■指定討論者**

小林 直人（愛媛大学 学長特別補佐、教育・学生支援機構 教育企画室長、医学部 総合医学教育センター長 教授）

昭和 63 年 3 月東京大学医学部医学科卒、平成 7 年東京大学にて博士（医学）の学位取得。平成 17 年度より愛媛大学医学部教授、平成 21 年度より愛媛大学教育・学生支援機構副機構長と教育企画室長を兼任。教育担当理事（教育・学生支援機構長）のもと、大学全体のFDをミクロ・レベルからマクロ・レベルまで幅広く担当。平成 27 年度より愛媛大学学長特別補佐（教育企画、能力開発）を兼任。

司会 高橋 尚志（香川大学 大学教育基盤センター長）

**■プログラム概要**

29年度より、SD（Staff Development）が義務化された。平成20年度のFD（Faculty Development）義務化から早10年、大学教職員の能力開発は、確実にその対象と内容を拡充しつつある。他方、法人化以降、こうした大学改革が矢継ぎ早に行われることによって、大学教職員が疲弊してきたのも事実であろう。はたして、大学教職員に今、何が求められているのか。また、それをふまえて、我々はどのように行動すればよいのだろうか。大学教職員の能力開発を考えるにあたっての核ともいえるこの問いを、本シンポジウムでは考えたい。奇しくも、平成30年度はSPOD設立から10年という節目の年にあたる。その節目の年に、「教職員のミニマムエッセンシャルズを考える」をSPODフォーラム2018の全体テーマとして掲げ、シンポジウムでは参加者の皆様と一緒にSPODの10年を振り返り、これからの10年を考える。本シンポジウムによって、四国内外の大学等における教職員の能力開発に寄与したい。

**■主な受講対象**

教職員（SPODフォーラム2018に参加される全ての方）

**■日時・場所**

日時：平成30年8月30日（木）15：30～18：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 3101A

# 授業内グループワークへの 参加意欲を高めるためのアイデア

### ■講師

村田 晋也（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師）

九州大学大学院経済学府博士後期課程満期取得退学。九州国際大学経済学部経営学科専任助教を経て、平成26年9月より現職。現本務校においてFD活動に加え、学生の能力開発（「愛媛大学リーダーズ・スクール（ELS）」、及び文部科学省大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシッププログラム（UNGL）」の運営）に携わる。専門は組織論、人的資源管理論、リーダーシップ論。

### ■プログラム概要

「社会人基礎力」「就職基礎能力」「学士力」などに示される内容からも明らかなように、現在、大学在学中に学生が体得するよう実社会から期待される能力は多様化しています。これらを背景に、大学では教員が一方向的に講義を行い知識を伝達していく教授法のみならず、学生自身が主体的・能動的に授業に参加するアクティブラーニングの導入が推進されていることは周知の通りです。

現在、多くの先生方がご自身の担当授業に、学生同士のディスカッションや多様な形式のグループワークなどを導入されていることと思いますが、この研修では、これらの活動に対する学生の参加意欲をより向上させるための仕掛けや工夫について、様々なアイデアを取り上げてまいります。なかでも、授業の導入部分に焦点を当て、学生の参加意欲を刺激し、協同的な学習の意義や有効性に気付いてもらうためにウォーミングアップとして導入できるアクティビティについて体験的に学んでいただけるよう計画しています。研修の中では、先生方のご経験をシェアしていただく機会も設けたいと思います。多くの方のご参加をお待ちしております。

### ■主な受講対象

授業内でグループワークやディスカッションなどを導入（ないしは導入を検討）している教員の方を歓迎致します。併せて、各種セミナーの講師経験があったり、今後講師を務める予定をお持ちの職員の方々にもご参加いただくことができます。

### ■本プログラムの到達目標

1. 授業内でのグループワークへの参加意欲を高めるアイデアの幾つかについて説明できる。
2. ウォーミングアップのアクティビティについて、その意義と有効性を説明できる。
3. 学生の参加意欲を刺激するアイデアを、実際の体験を通して習得し、自分の授業（ないしセミナー等）への導入を検討できる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）10:00～12:00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク・講義

プログラム番号 3101B

# 障害学生の支援について

### ■講師

小方 朋子（香川大学 教育学部 教授）

広島大学大学院教育学研究科博士課程後期退学、平成8年より香川大学教育学部に勤務。  
特別支援教育の基礎理論担当。

### ■プログラム概要

障害があると診断された学生以外にも、多様な教育的ニーズを持つ学生たちが多数在籍しています。その学生が持つ困難に対応するためには、障害特性や支援方法について理解しておくことが有効だと思われます。さらに発達障害の特性を理解するだけでなく、家庭の事情を考慮すること、友人関係、生活全般の困難、就職活動のつまづきなど、さまざまな事柄を関連付けながら支援を考えることも重要です。グループワークを交えながら支援のあり方を考えます。

### ■主な受講対象

教員、学生支援に関わる職員

### ■本プログラムの到達目標

1. 特別な配慮が必要な学生たちの個別のニーズに対して、教職員が連携し組織的に対応していくことができるための基礎的な知識を得ることができる。
2. 大学における合理的配慮について考えることができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 学生の学ぶ意欲を引き出す授業とは？

### ■講師

岩中 貴裕（山口学芸大学 教育学部 教授）

平成 19 年 3 月兵庫教育大学連合大学院単位取得退学、平成 21 年 3 月兵庫教育大学にて博士（学校教育学）の学位取得。平成 22 年 4 月から平成 27 年 3 月まで香川大学大学教育センター所属。学内のFDプログラム講師、SPODフォーラム講師、SPOD内部派遣講師を担当。現在は山口学芸大学教育学部教授。専門は教室第二言語習得研究。

### ■プログラム概要

学生の学ぶ意欲を引き出すためには動機づけ理論についての理解が求められます。本講座では動機づけ理論についての講義を受講した後、受講生が協同学習の技法を実際に体験します。講座は以下の流れで実施します。

#### 1. アイスブレイキング・講師自己紹介

グループ内で自己紹介等を行うことによって緊張感をほぐします。

#### 2. 学生の学ぶ意欲を引き出す授業とは？（講義）

授業を行う際にどのような点に配慮すれば学生の学ぶ意欲を引き出すことができるのかを、自己決定理論に基づいて説明します。

#### 3. 協同学習体験

自分の授業で簡単に導入することができる協同学習の技法を3つ（ラウンド・ロビン、シンク・ペア・シェア、ペア学習）体験してもらいます。

#### 4. 事例紹介

講師自身が自分の担当する授業で実践していることを紹介します。

#### 5. まとめ・質疑応答・アンケート

配布資料に基づき、講座の内容を振り返ります。

### ■主な受講対象

以下の項目のいずれかに該当する教員を対象としています。本講座は受講者による活動がかなりの部分を占めます。活動に積極的に参加できることが受講のための基礎資格となることをご理解ください。

1. 講義経験がない、または数年未満の教員
2. 協同学習の技法に関心のある教員
3. 自分の授業を改善したいと思っている教員

### ■本プログラムの到達目標

1. 学生の学ぶ意欲を高めるための理論的な枠組み（自己決定理論）を概説することができる。
2. なぜ協同学習が学生の学ぶ意欲を引き出すのか説明することができる。
3. 学生の学ぶ意欲を引き出す授業計画を立てることができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

**職員のための「前向きな職場づくり」実践  
一個の力・組織の力を活かすー**

■講師

宮林 常崇（公立大学法人首都大学東京 管理部URA室長）

修士（経済学）、民間企業を経て、平成22年4月公立大学法人首都大学東京へ入職、自己点検・評価、DP・CP策定、文科省出向、副専攻プログラムの立ち上げ、全学教務総括、キャンパス管理総括等に従事し、平成30年4月から現職。名古屋大学高等教育センターSD研究会メンバー、大学教務実践研究会事務局長、公立大学職員SDフォーラム代表等を務める。

■プログラム概要

職員対象の研修はSD義務化も追い風となり年々増加していますが、研修だけで「特定の職員に業務が偏る」などの職場の混乱が解消されることはありません。現場の混乱を解決するためには、扱う業務の量・質の変化にも耐えうる組織の構築が不可欠です。

このセッションでは、正規職員が1名しかいない職場、家庭と仕事の両立に悩むスタッフ等、現場のリアルな職場環境を前提として、「前向きな職場づくり」のために、ミドル層は何ができるか、何をすべきかを考えます。具体的には、①業務改善・②副担当の実質化・③実践的な知識の継承・④部下育成、等に必要なスキルや事例を確認し、「論理的に考えることが苦手なスタッフをどうするか」等をテーマにグループワークを行います。SD義務化の理念を実現するために、現場で何ができるかを考えるきっかけとします。

\* SPODフォーラム2017『職員のための「前向きな職場づくり」入門ー実践知を可視化、活用するー』を受講していなくても、受講可能です。

■主な受講対象

主任、係長、課長補佐相当の職員

もしくは課・係単位の組織運営に課題を抱えている職員等。

■本プログラムの到達目標

1. 大学事務組織の特徴を理解し、自分の言葉でまとめることができる（例：三遊間のゴロが苦手）。
2. 課・係単位の組織改善に必要な技術を身に付けることができる。
3. 前向きな職場づくりに貢献することができる。

■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 3101E

# 教職員のための「大学の危機管理」 —事例から考えるハラスメント—

### ■講師

吉田 一恵（愛媛大学 教育学生支援部 愛媛大学SD統括コーディネーター／能力開発室長）

愛媛大学法文学部法学科卒業。文部事務官として愛媛大学各部局、国際交流センターにおいて主に総務、国際交流を担当。法人化を挟み、広報室長、人事課長、教育学生支援部長を経て平成29年4月から現職。広報室・人事課での約6年間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、主に人材育成・評価、労務、男女共同参画、人権侵害事案等々に対応、全事務系職員へのスタッフ・ポートフォリオの導入も実施、教育学生支援部では、入学から就職までの学生支援活動、危機管理事案に対応するとともに、現在まで一貫して教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDCとして職員の能力開発に取り組んでいる。

高木 佳代子（愛媛大学 総務部就業環境推進室 副室長）

放送大学教養学部卒業。愛媛大学採用後、情報関係、共済関係及び学務関係の業務に携わる。平成28年度4月から就業環境推進室にて、人権侵害事案、裁判対応、相談窓口に係る業務を担当。平成29年4月から現職。

### ■プログラム概要

あなたが今、何気なく行っているその言動は、ハラスメントではありませんか？

一人一人が異なる背景をもって勉学や仕事に臨んでいる現在、組織としてまた個人として、高等教育機関におけるハラスメントについて改めて考える必要があるでしょう。

本プログラムでは、大学等において、今、身近にあるハラスメントについて説明すると共に、ハラスメントが起こった時の初期対応、未然に防ぐための気づきについて考えます。特に、複雑かつ多様化するハラスメントについて、具体的事例を挙げながら、「ケースメソッド」により省察し、①ハラスメント認定のポイント、②ハラスメントが起きた場合の対処方法、③ハラスメント「施策」を導き出していきます。

### ■主な受講対象

全ての教職員の方々を対象としています。特に以下のような方を歓迎します。

- ・改めてハラスメントに対する基礎知識を得ようと思っている。
- ・ハラスメントに対する知識を最新のものにしたいと思っている。
- ・攻めのハラスメント防止策を考えたいと思っている。
- ・正に、ハラスメントに直面している。
- ・現に、ハラスメントを見聞きしている。

### ■本プログラムの到達目標

1. ハラスメントについて、説明することができる。
2. ハラスメントの事実認定ができる。
3. ハラスメントに対処できる。
4. ハラスメントの予防対策を構築することができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）10：00～12：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク・講義

プログラム番号 3101F

# FD担当者研修 —問題解決のためのFDを設計する—

### ■講師

中井 俊樹（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 教授）

専門は大学教育論、人材育成論。1998年に名古屋大学高等教育研究センター助手、2007年に准教授、2015年より現職。大学教育学会理事および日本高等教育開発協会理事。著書に、『大学のFD Q&A』（共編著）、『アクティブラーニング』（編著）、『看護教育実践シリーズ2 授業設計と教育評価』（共編著）、『看護教育実践シリーズ3 授業方法の基礎』（共編著）、『大学のIR Q&A』（共編著）、『大学の教務 Q&A』（共編著）、『大学教員のための教室英語表現 300』（編著）、『大学教員準備講座』（共著）、『成長するティップス先生』（共著）などがある。教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDC。

西野 毅朗（京都橘大学 教育開発支援センター、現代ビジネス学部経営学科 講師）

専門は大学教育論。2016年に博士（教育文化学）を取得。同年、京都橘大学に着任し、教育開発支援センターの立ち上げに参画。学内のマイクロ・ミドル・マクロレベルの教育開発を支援する専門家として実践ならびに研究を重ねている。日本高等教育開発協会正会員・事務局長、大学コンソーシアム京都FDフォーラム実行委員、私立大学連盟研修委員。共著書として『FDのQ&A』『アクティブラーニング』『研究指導』（いずれも玉川大学出版部）がある。

### ■プログラム概要

教育の課題解決に向けて大学や学部はどのようにFDを進めていけばよいのでしょうか。本プログラムでは、FDに関わる教職員として必要となる基礎的な知識を習得することを目的とします。

FDとはどのような活動なのか、FDをどのように企画・運営・評価したらよいのか、教員をFDにどのように巻き込むことができるか、FDを効果的に推進するためにどのような制度を構築したらよいのかなどの論点を整理し、FDのさまざまな実践事例を紹介することで、参加者の所属大学に適したFDの方法を明確にしていきます。

参加者のみなさまには、ディスカッションやグループワークなどの活動に積極的にそして建設的に参加することを期待しています。みなさんが職場で培ってきた経験や考え方は、自らの貴重な学習資源になるとともに、他の参加者にとっても貴重な学習資源となるからです。

### ■準備物や事前課題

最初のオリエンテーションで、自大学のFD活動を簡単にご紹介いただく予定ですので、3分程度で自大学のFD活動概要を説明できるように準備をしてきてください。もし自大学等で行っているFDに関する資料があれば、ご持参ください。

### ■主な受講対象

大学・短期大学・高等専門学校でFDを担当する教職員。あるいは、組織的な教育改善を推進する立場にある教職員。

### ■本プログラムの到達目標

1. 所属機関のFDの特徴と課題を説明することができる。
2. FDの意義とさまざまな方法を説明することができる。
3. 所属機関の教育課題を解決するFDの方法を提案することができる。
4. 他機関のFD担当者と友好的なネットワークを構築することができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）10：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 3102A

# ルーブリック評価入門 ー考える、つくる、活用するー

### ■講師

侯野 秀典（高知大学 地域協働学部／大学教育創造センター 講師）

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師を経て、2015年より現職。放送大学非常勤講師（ファシリテーション入門）。

教育評価や教育方法を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。高等教育開発の専門家として、学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるワークショップを開発・支援・実施。2010年より担当している本プログラムは毎年最高水準の評価を得ている。関連する著書に『大学教員のためのルーブリック評価入門』（共訳、玉川大学出版部）がある。

### ■プログラム概要

成績評価について、多様な評価基準を設定することが求められております。ある大学の『シラバス入力手順説明書』では、“具体的な評価基準はルーブリック評価シートを事前に配布し、配点30点とする”との例が示されたりしており、「ルーブリックって何??」と戸惑われた教員の方も多いと聞いております。

そこで本プログラムは、成績評価の目的・意義から出発して、高等教育において近年注目が集まっているルーブリック評価についての基本的な考え方を理解することを目的として実施されます。

※ルーブリックとは、「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、評価指標として活用されます。本プログラムでは、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクスからなる分析的ルーブリックを主に取り上げます。

### ■主な受講対象

目標に準拠した評価方法を習得したい教員

評価について関心のある教職員

協同型アクティブラーニングを体験したい教職員

### ■本プログラムの到達目標

1. 目標に準拠した評価を心がけることができる。
2. ルーブリック評価の意義を説明できる。
3. ルーブリックを授業で活用するための準備ができる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）13:00～15:00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## 大学教職員のための留学生受入実践:最初の1ヶ月

### ■講師

バージン・ルース（愛媛大学 国際連携推進機構 国際連携企画室 特命教授）  
University of Puget Sound, Tacoma, Washington, USA 卒業。1996年より愛媛大学農学部留学生担当講師となる。2002年に愛媛大学留学生センターに異動し、全学の留学生生活支援を担当すると同時に、日本人学生の海外派遣プログラムの開発・支援にも携わる。専門は異文化コミュニケーション。

高橋 志野（愛媛大学 国際連携推進機構 国際教育支援センター 准教授）  
Asian Studies, University of British Columbia, Canada の M.A. 修了。2002年より愛媛大学留学生センターで、留学生への日本語教育、日本語教員養成教育に取り組むと同時に、留学生日本語ボランティア J-support システムの運営に携わる。専門は言語学・外国人に対する日本語教育。

### ■プログラム概要

外国人留学生にとって「安心できる受入体制」とは、どのようなものでしょうか。各教育機関で実施してきた「過去の留学生数・国籍に基づいた」取り組みは、最近の外国人留学生受入数の増加・多様化に伴い限界に近づいてきており、多くの機関で新たな受入体制の構築が求められているのではないのでしょうか。特に、オリエンテーションをはじめとした最初の1ヶ月の受入体制がどれだけ適切かは、非常に重要となってきています。

本プログラムでは、愛媛大学の実践を紹介しつつ、留学生受入最初の1ヶ月に実施するオリエンテーション等での必須項目を確認していきます。参加者全員で自分達の実践事例（失敗談や現在進行中の事例も大歓迎です）を積極的に共有することで、それぞれの教育機関にとって効率的で有効な「留学生受入オリエンテーション」が可能になることを期待しています。

### ■主な受講対象

学内の国際交流に関わる立場、または国際交流に関わる業務に関心のある教職員

### ■本プログラムの到達目標

1. 留学生受入のオリエンテーションがなぜ必要か説明できる。
2. 留学生受入オリエンテーションに必要な基本情報は何か説明できる。
3. 自分の所属機関にふさわしいオリエンテーションを設計できる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）13:00～15:00

場所：香川大学幸町北キャンパス

## ワーク中心

プログラム番号 3102C

# グラフィック・シラバスを書こう

### ■講師

宮田 政徳（徳島大学 教養教育院 非常勤講師）

広島大学大学院 文学研究科修了（英語学）。2001年10月より徳島大学 大学開放実践センター勤務後、2013年4月より徳島大学 教育改革推進センターへ異動。2014年4月より総合教育センターへ異動。徳島大学では、2002年より全学FD企画・運営を担当。2010年よりSPODコア校徳島大学のFDを担当。2018年退職後、徳島大学教養教育院非常勤講師。

### ■プログラム概要

グラフィック・シラバスは、通常のシラバス（テキスト・シラバス）では表現できない学習内容をフロー・チャートやダイアグラムや樹形図を使って、一枚のマップで示したものです。学生はグラフィック・シラバスを見ることで、テキスト・シラバスでは分からなかった、毎回の授業目標・内容の流れとそれらの関連性を容易に理解し、授業全体の概念をつかむことが出来ます。一方教員にとっては、グラフィック・シラバスを書くことによって、授業全体の構造を視覚的に概念化し、毎回の授業をよりスムーズな流れで行うことが出来るようになります。

グラフィック・シラバスは喩えていえば、学部や学科の授業のカリキュラムを視覚的に表した「カリキュラム・マップ」のようなものです。このカリキュラム・マップで授業間の関連性がわかるのと同じように、グラフィック・シラバスでは、毎回の授業が授業全体の中でどの位置にあるのかが分かります。

本ワークショップでは、グラフィック・シラバスの概念、その意義や特徴を解説し、作成の仕方を説明した後、参加者皆さんに自身のグラフィック・シラバスを書き上げて頂きます。

### ■準備物や事前課題

当日ご自身の授業のシラバスを持参ください。

### ■主な受講対象

自身のシラバスや授業を改善したい教員

### ■本プログラムの到達目標

1. テキスト・シラバスとグラフィック・シラバスの違いを説明できる。
2. グラフィック・シラバスの特徴を説明できる。
3. グラフィック・シラバスを書き上げる。

### ■日時・場所

日時：平成30年8月31日（金）13:00～15:00

場所：香川大学幸町北キャンパス

**5年後のなりたい自分像のために  
－何から始めますか？－****■講師**

各務 正（梅光学院大学 副学長）

1972年東京都立大学経済学部卒業、2011年順天堂大学大学院医学研究科博士課程修了、博士（医学）の学位取得。1972年から定年まで順天堂大学在職。大学院並びに医学部、看護学部の教学部門、新学部開設準備室、国際交流センター、学校法人の経営企画などを歴任。1998年から大学行政管理学会を中心とした学会活動に参加。1999年から同学会「大学職員」研究グループ・リーダーとして全国の大学で教職員との直接対話による実践重視のSD研究・研修を推進。2011年から4年間SPOD事業評価委員。2016年から現職。

野口 里美（香川大学 経営管理室企画グループリーダー）

1986年香川大学採用。総務、会計、学務を一通り経験した後、今年度から現在の部署に所属。2007年度から2012年度までFD関係業務を担当し、SPOD設立当初からネットワークコア校のFD担当事務として携わる。SPODフォーラムでは、「ワールド・カフェ」「ツールを使ってコミュニケーション～自己理解と他者理解～」の講師を担当。2015年度SPOD-SDC認定。2016年度教職員能力開発拠点SDC認定。その他、Coco-iku（心育）インストラクター（SPTコミュニケーションカウンセラー）、キャリアアトランプファシリテーター認定。

**■プログラム概要**

みなさんは5年後どのような大学職員になっているのでしょうか。

現在、職員の能力開発のために初任者研修から始まり職位にそった研修や特定のスキルを身に付ける研修など、様々なプログラムが用意されています。これらの受講にあたっては、しっかりと自分なりの目標を定めて参加するよう指導もあったと思います。ただ私たちの経験では職員は日常業務に精一杯で、自分自身の研鑽目標をじっくりと考える時間がなかったように感じます。

このプログラムでは、5年後の自分像、いまの自分、5年前の自分、を仲間とともに観察しディスカッションすることによって自分自身の目標を見える化することを目的としています。これができれば受講したい研修等は自ずから見えてきます。自分で気が付いていなかったことを教えてくれる仲間は自分にとって、また自分は仲間にとってのファシリテーターです。そうしたインタラクティブな時間を楽しみながら、自分自身の5年後の像に近づくロードマップを確実にしましょう。

**■準備物や事前課題**

当日は「教職協働を実践している自分像」を軸として、ディスカッションします。それをテーマに、5年後のなりたい自分像について考えてきてください。

**■主な受講対象**

主任・係長相当級の職員を対象とします。

**■本プログラムの到達目標**

1. 自分の考えを他者に伝えることができる。
2. 他者の考えや思いを自分の言葉に置き換えて考えることができる。
3. 自分自身に必要な行動（アクション）を客観化することができる。
4. テーマ（話題）にそってディスカッションすることができる。

**■日時・場所**

日時：平成30年8月31日（金）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス

**ケースメソッドを活用した能力開発  
(SPODフォーラム2016優秀ポスター賞受賞取組)****■講師**

上畠 洋佑（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 特任助教）

平成 16 年 3 月広島大学文学部人文学科卒、平成 25 年 3 月東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コース修士課程修了。平成 27 年 4 月より金沢大学国際基幹教育院高等教育開発支援部門（旧：大学教育開発・支援センター）特任助教、平成 30 年 4 月から現職。IR やSDに関する人材育成を中心に高等教育に関する研究と実践を担当。

松村 典彦（金沢大学 スーパーグローバル大学企画・推進室 専門職員／

国際部留学企画課 留学推進係長）

平成 15 年 3 月金沢大学文学部史学科卒、平成 17 年 3 月金沢大学大学院文学研究科修士課程修了。平成 17 年 9 月九州大学大学院人文科学府中途退学。平成 17 年 10 月より金沢大学事務職員として、予算編成、文部科学省行政実務研修、事務局長秘書、研究支援、外部資金管理業務等に従事し、平成 27 年 4 月よりスーパーグローバル大学創成支援事業の総括管理を担当。また、平成 30 年 4 月より国際部留学企画課留学推進係長を併任。入職より自主的なSD活動を継続的に実施し、平成 28 年度より金沢大学においてケースメソッドを取り入れたSDプログラムを開発・実施。

**■プログラム概要**

金沢大学では、平成 28 年度から業務改善・改革プロジェクトとしてケースメソッド型SD研修を教職協働で開発し、新人・中堅・管理職クラスの大学職員を対象に実践を積み重ねてきました。この実践を振り返る中で、当該研修が大学職員の研修に有効に機能し、職階や、職務系統を超えた相互理解に資することが明らかとなり、この成果をSPODフォーラム2016において報告した結果、優秀ポスターを受賞しました。さらには「教育改善・大学の組織開発を支える研修人材育成拠点」として金沢大学が文部科学大臣から認定を受けており、その研修プログラムの一つとして全国の大学に提供されています。

本プログラムでは、ケースメソッドを知識として理解するのではなく、参加者がケースメソッド型ワークショップを実際に体験することを通して、今後SDを自大学等で企画・運営していく中で活用していくためのヒントやエッセンスを学習する機会として提供します。

**■準備物や事前課題**

あり（ケースを1～2週間前に事前配布して読んできていただきます。）

**■主な受講対象**

SDに関する企画運営業務を担う教職員

学内外の自主的なSDを企画運営する教職員

**■本プログラムの到達目標**

1. ケースメソッド型ワークショップの体験学習を通して、ケースメソッドがどのようなものか説明することができる。
2. 本プログラムで学習したことを用いて、自らが担当もしくは自発的に企画しているSDをより良いものにするためのヒントにすることができる。

**■日時・場所**

日時：平成30年8月31日（金）13：00～15：00

場所：香川大学幸町北キャンパス